病院図書室　15(3):104-106, 1995

寄稿

L-pal システムの利用を試みて

山　室　真知子

一昨年(1993)4月からの製薬会社の文献情報サービス自粛以来、多くの病院図書室では文献複写の入手及び文献検索などの件数が著しく増加し、図書室の日常業務は相互貸借に終始し、他の図書室業務が停滞しがちとなっている。

当院においても相互貸借の件数は前年の約2倍となり、日常業務の大半は相互貸借に費やされることとなった。その結果、患者サービスのための一般図書の選択、新刊図書の購入、整理にはほとんど手がつけられない状態となり何らかの方策を考えざるを得なくなった。そこで業者による代行サービスの利用を考え、病院図書室でも利用できるようなシステムについて、業者との折衝を試みた。

まず問題となる料金について、①基本料金及び複写料金を病院図書室を対照とした価格を考慮してほしい、②手間のかからぬ簡便な方法で依頼を受付けてほしい、③文献の送付料金・料金支払手数料についてもできるだけ安い方法を、④著作権法に基づいた文献入手などについて、などの条件が受け入れられて近畿病院図書室協議会会員のための L-pal system が設定された。早速当院では、昨年(1994)9月より図書委員会の承認を得て L-pal system の利用を試みることにした。

〔表1〕は L-pal system 利用以前の昨年(1994)5月、6月と利用開始後の10月の院外依頼の文献入手状況を比較したものである。5月の依頼件数は131件と多く、JOIS 検索によるものが多かったため JICST の¥ORDを利用した上、阪大、IMIC などへも依頼せざるを得なかった。従って文献1件の諸経費(複写料金・送料・支払いのための費用)は平均469円となっている。6月は依頼件数が少なく、病院図書室(近病図協会員病院)と複写料金が1枚35円の公立大学への依頼のみであったので、文献1件の平均諸経費は305円であった。

10月の L-pal system では年間利用のコースを利用し、月100件の基本料金を含めての料金である。数件、または10数件が一度に納

［表1］　依頼先別による依頼文献に関する比較

	1994年　5月	1994年　6月	1994年　10月
依頼件数	131	65	128
枚　数	511	265	450
経　費	61,499	19,857	54,017
(平均1件)	469	305	422
平均日数	3.5	3.0	2.4
(最高日数)	(18)	(11)	(7)
謝絶件数	9	9	0
依頼先	公立大学 病院図書室 (近病図協会員病院) 国立大学(4件) IMIC(5件) JICST (17件)	公立大学 (1枚35円の最高のみ) 病院図書室 (近病図協会員病院)	L-Pal システム利用

やまむろ　まちこ：京都南病院図書室

品されるため送料が割安となり、支払いの振込料金は月110円(1ヵ月分まとめての支払い)で済むためであろうか、1件の平均諸経費は422円と予想したより安価であった。謝絶のための再依頼は業者がしてくれるので、この月のキャンセルは0件、文献入手までの日数も早くなっている。

以上は、限定された3ヵ月についての比較であるが、これまで L-pal system を利用してきた経験のなかから利点と問題点を挙げてみたい。

1. L-pal system 利用の利点

(1)文献申し込み受け付けから依頼まで

資料の所在と依頼先調査が不要となり、件数に制限なく FAX での一括依頼が可能である。これまで文献の1件1件の所在を調査し、相手館1館の依頼件数を1～2件以内に分散するのにいかに多くの時間を費していたことか、その労力と時間がほとんど解消されただけでもこのシステムを利用した価値があった。依頼の書式が決められていないので、一度に多くの件数を受け付けた時には検索の打ち出し用紙や、文献の Reference の箇所をコピーしたものに、必要文献をマークして FAX 送信することもできる。これまで20～30件の文献を一度に受け付けた場合は、その日のうちに依頼手続きができなかったことを思うと、文献入手までの日数の短縮にも繋がることになる。

また依頼先への遠慮や気づかいからも解放されることになった。

(2)文献の受理から料金の送金

文献の受理は、依頼件数が多いときには数件またはそれ以上の文献が一度に到着して依頼者から喜ばれている。複写料金は月1回の一括払いにより、文献の送料と料金の送金手数料は減額となり、依頼先別への送金の手間と時間が省けた上、支払い漏れの心配もない。

このように業務量の面において、また精神的な意味においても負担が非常に緩和されることになった。

2. 料金の問題

複写料金の単価(1枚60円)は会員病院をはじめ1枚35円の国公立大学への依頼と比較すると増額となるが、国立大学は現金書留払いで送料がかさみ、多くの公立大学では1枚50円以上の料金となっており、L-pal system の1枚60円は必ずしも高いとは言えないであろう。〔表1〕で示すとおり、現金封筒での料金支払いの国立大学への依頼や医中誌刊行会、または JICST(¥ORD)や、IMIC へ依頼する件数が多い月の1件当たりの平均料金は、基本料金や消費税を含めても L-pal system 利用の方が安価となる。難は単行書の1枚150円の複写料金で、複写枚数が多い場合には高額となるのが気になるところである。しかし、NACSIS-IR で単行書の所蔵館を調べられない図書室での入手には一助となろう。

3. L-pal system 利用の問題点

複写を受け付けた文献の書誌事項の誤りが発見出来るのは、多くの場合は所蔵館調査の時であり、また書誌の変遷について学ぶ機会でもある。しかし L-pal system の利用では所蔵館調査のステップを踏まないので、誤りに気づかずに業者に発注してしまうことになる。また所蔵していない雑誌の改題等についても知る機会がなくなり物足りなさを感じる。それを補うために、初めての雑誌や、馴染みのない雑誌名に出会ったときには、時間が許す限りその雑誌の書誌や発行所を調べて糧とすることに心がけている。

複写料金の点では、当院は公費となっているので1件当たりの月平均料金で比較できるが、個人負担の場合は1件毎に基本料金が上積みされることになるので、全面的に L-pal system への移行は難しいかも知れない。しかし、国外への依頼や医学関係以外の機関へ

の依頼に限って利用するのも非常に有効と思われる。謝絶文献(キャンセル)は、これまで看護関係のものがあり、件数としてはごく少ない。L-pal を利用している他の図書室からも看護文献の謝絶が多いとの感想があるが、看護関係の出版物は特殊な販売ルートや地区に限定されたりして確かに入手しにくいものが多いからであろう。また多分、著作権の問題からの理由であろう、身近の大学に所蔵されている文献の謝絶が1件あった。

当図書室における約半年間の L-pal system を利用しての結果としては、料金の面ではいささかの上昇は避けられなかったが、文献依頼に関しての業務量の軽減は顕著であった。まず文献依頼のための休日出勤の必要はなくなり、図書室業務の円滑さが回復しつつある。またこれまで放置されていた蔵書点検や改訂図書の調査と購入などにも着手できたが、とくに本年は阪神大震災による医療班ボランティア活動として避難所での「子ども図書室」や、救護活動ニュースや報告書の編集に参加出来たことは意義深かった。

計らずも製薬会社の文献サービスの自粛により図書室の仕事が再認識されたにもかかわらず、ここで業者の代行サービスに依存することは、図書室、または担当者にとってマイナスにならないかとの意見が多く聞かれる。いうまでもなく文献依頼が図書室の日常業務の一つとして処理すべきではあるが、そのために他の業務やサービスに著しく影響を及ぼす場合には代行サービスも考えねばならないであろう。また、この機会に図書室業務やサービスは決して文献入手だけではないということを知ってもらうことが必要と思う。そして代行サービスを利用した場合には、それによって得られた時間がどう活かされているかを明確に示し、図書室サービスをよりよく理解してもらうことに繋げられないだろうか。また、ネットワークによる病院図書室の相互協力は決して文献の流通のみではなく、もっと多岐にわたる協力活動を目的とするものであることを再認識したい。

(本稿は去る1995年7月1～2日開催の「第12回医学情報サービス研究大会」に於いて発表したものに加筆したものである)